

社会貢献と産学連携の新しい形



巻頭言

馬場章夫*

A contribution to the society, industry-university cooperation.

大学の役割は研究，教育に加えて社会貢献が重要であるといわれ，これらについて定量的に評価されます．これに対し，大学は自由な研究と人材育成が真の任務であるとの「正論」があり，学外の方たちからも大学は「正論」を守り，独立法人化や最近の風潮に流されようにとの励ましを多くいただきます．しかし，研究，教育とは別に社会貢献という言葉がことさらのように付け加えられた事実は，やはり「正論」だけでは通用しなくなっているということです．永久に存在するかもしれない正論は宗教以外にないと思います．独立法人化は明治維新以来のできごとであり，最近の研究と教育は否定されたと受け止めるのが大学人には必要ではないでしょうか．新しい正論を構築して，社会から尊敬され信頼される大学へと大きく発展することのできるチャンスに恵まれたと受け止めるべきではないでしょうか．とくに若い方にとってはすばらしい時代です．託したいと思います．

根本的に変えるには，仕組みを変え，人を代えるのが効果的ですが，急にできる話ではありません．しかし，従来型のものをいったん否定してみることは必要であり，工学研究科においてもさまざまな変革を試みています．教員の任期制と評価の仕組みの構築，フロンティア研究センターおよび高度人材育成センターの設置，振興調整費などによる大型研究，

グローバルCOEなどによる教育プログラム，さらには人事システムを変える目的の「若手人材育成プログラム」の導入などが進められています．これらは，新しい形での研究と教育を確立し，それを力として優秀な人材，特に若手研究者，博士課程の学生を集めて育てることが重要であるとの認識に立ったものです．人気ある阪大工学研究科を夢見ています．一方，産学連携も同様であり，新しい形を常に模索していきたいと思います．社会は速い速度で変化していますので，対応していく必要があります．社会貢献という言葉は好きではありません．何か高見からものをいっているようでし，強要すべきことではないと思います．工学研究科では産学連携が得意ですので，これを手段として人材を育て大学での研究を確立できればいいと考えています．貢献などと肩を張らずに，産学連携も社会と大学が常識に従って普通に共同で活動することが，阪大工学研究科らしさではないでしょうか．このような考えのもとに設立された共同研究講座については，その内容はすでに紹介しましたので繰り返しません，制度ができて2年間で10講座（全学では14講座）を数えるまでになっており，これからも順調に成長していくと期待しています．この講座制度などを使って社会の方との距離をさらに近いものとしながら，新しい連携の形を作っていけると信じております．阪大らしい，柔軟な運用で若い研究者や学生が主体的に活躍でき，研究教育の場ともなるような産学連携のあり方を期待しております．そのためには，産学の強固な相互信頼関係の構築が何よりも重要です．協会に所属されています諸先輩のご支援を切にお願い申し上げます．



* Akio BABA

1949年1月生
大阪大学工学部応用化学科（1971年）
現在：大阪大学大学院工学研究科 教授
工学博士 有機合成化学
TEL：06-6879-7384
FAX：06-6879-7387
E-mail：baba@chem.eng.osaka-u.ac.jp